三鷹市市民海外活動支援事業の事業報告書

カンボジアワークキャンプ

カンボジアワークキャンプについて

・ 主催　特定非営利活動法人 Caring for the Future Foundation (CFF)

・期間　2005,8,23～9,6（約二週間）

・メンバー　22人（日本人12人、カンボジア人10人）

日本人のディレクター１人

リーダーは日本２人・カンボジア１人

キャンパーは日本９人・カンボジア９人

・滞在地　カンボジアのプノンペンにある“GDI”（Grassroots Development Institute）という貧しい青年たちのための英語教育の学校で寝泊りをさせていただきました。

・内容　大まかに言うと前半一週間はスタディツアーでカンボジアの博物館などを回り、後半一週間はGDIでワークといった内容でした。

＊ 登場する人名

パートナー　ダイン

キャンプディレクター　けいこ

friendship 班メンバー　ダイン、コンコイ、パノウ、やよい、はるか

岩崎美和子

このキャンプの特徴

・ パートナー制について

カンボジア人と日本人の異性でのパートナー制がこのキャンプの最大の特徴だと思う。たとえば、日本人の女の子とカンボジア人の男の子がパートナーとなってキャンプを過ごすということである。食事をパートナーごと作ったり、スタツアではクメール（カンボジア語）の話せない日本人の通訳代わりになってくれた。このように生活する中で、パートナー同士は特にお互いのことを気遣い、助け合うようになっていった。恋でも芽生えさえたいのか？とも思うかもしれないが、きちんと理由がある。もともと、このキャンプはパートナー制など導入していなかった。そのころ、寝るのとお風呂が一緒なためか女同士、男同士では仲良くなるものの男女で別れてしまい「一つのまとまり」になりきれないことがあり、それを解決するために始まったらしい。このパートナー制は見事にその役割を果たし、このキャンプは性別や国に関わらず「一つのまとまり」を作り上げた。さらに、パートナーでいることが多いために、一緒にいるだけで、英語で話さなくてはいけない状況に追い込まれ、英語を頑張って話そうとするひとつのきっかけにもなっていた。だんだんと、パートナーの英語が聞き取りやすくなり、さらに、相手のことが分かっていく。まずはパートナー、次に班、そして全体へと輪が広がっていった。

・ GDI（英語の学校）での生活

GDI で、カンボジア人と寝食をともにした。寝るときはまず、蚊帳をはる。洗濯機はもちろんないので手洗いだ。時間がかかるために洗濯物がたまってしまった・・・。お風呂もカメの水をバケツにいれ風呂場へ運んで行く。風呂場といっても外で、大きなバナナの葉で囲まれているだけだ。星空のモト開放的なお風呂タイムを満喫した。トイレも行きたいと思っても駆け込むわけにはいかない。まずバケツで水を汲んでから、それを持って入る。紙があるわけではないから使いたかったら自分で持って入らなくてはならない。もちろん紙は流せない。カンボジア人は紙なんて使わなくてもへっちゃらだ。すこし、汚い話になったが、気をとりなおして、食べ物の話。屋台で食べるときもあれば、日替わりで各パートナーが作るときもあった。わたしもパートナーとカンボジア料理を作り“カンボジア流空中切り”も教えてもらった。カンボジア人はあまり「まな板」というものを使わないみたいだ。このような生活の中で、人々は協力し合わなくては生活できないのだと感じた。なんでも便利な日本とは違った感覚だ。人の優しさを感じられることが多かったのも、このような生活条件だったからかもしれない。

カンボジア人とずっと一緒にいることで、日本人だけでカンボジアに行ったのでは体験できないようなことが出来たと思う。毎日の仏教のお祈りであったり、カンボジア流お風呂の入りかたを教えてもらえたのは本当に貴重な経験だ。

前半の一週間スタツアの報告

≪８月２３日　メンバーご対面≫

このキャンプで生活をともにするメンバーとの運命的な出会いの日だった。パートナーを決めて、班も決まった。班の名前は、カンボジア人と日本人がかけがえのない友人になれるように「friendship」となった。今考えても素敵な班名だ。

≪８月２４日トゥールスレンミュージアム・CCH・ソイヤマーケット≫

トゥールスレンミュージアムは実際にポルポト政権時に収容所として使われた建物がそのまま博物館になったところだ。監禁されていた部屋はベッドのようなものがそのまま残され、中には発見された当時の写真が飾られている。ほかの部屋にも子供から大人まで物凄い数の犠牲者たちの写真が飾られていた。写真の子供たちの顔に笑顔はなく無表情だったことに寒気がしたのを覚えている。私がここでもっとも印象的だったのは、兵士が赤ちゃんを木に殴りつけている絵だ。「信じられない、理解できない」の一言。なぜ、人々は殺しあうのか？この絵の前に立ったとき、私は平和を願わずにはいられなかった。

≪８月２５日アンノンカガン・パゴダ・ゴミ捨て場・キリングフィールド・ナイトツアー≫

カンボジア政府はプノンペンをきれいな都市にしたいがためにスラムをなくしたいと考えていた。そこで、スラム数箇所に火をつけたのだ。それにより、スラムはすべて燃え尽きた。そして彼らはアンノンカガンへ移動してきた。これに対し政府は、やったことを認めずに「子供のいたずらで放火したのだ。」と発表をしたらしい。なんてことだ。本当に金持ちは権力者は自分のことしか考えていないとおもった。私はここでインタビューに挑戦！シンライさん３５歳女性。旦那さんはタクシードライバーで子どもが３人いる。ご飯は一日に一度だけ、狭い部屋に暮らしている。「ここには学校がありますが、お金がかかるので子供を行かせることが出来ない。ほかの家の子もそうだ。無料で行ける学校が欲しい。」そして、将来は「何か物を売る職につきたい、そして４歳の息子には医者になってもらいたい」という。これを聞いて「今の状態では医者になどなれるような状況ではない」という今の状況とのギャップを感じ、なんともいえない気持ちになった。勉強できないということはこのような状態から抜け出せないと言うことを表すのだと実感し、無料の学校の必要性を強く感じるとともに、教育の重要性をも感じた。

キリングフィールドはポルポト犠牲者の埋められた場所だ。大きな穴がいくつもある。ダインが「犠牲者たちはここまで歩いてきて、自分たちで穴を掘って、そしてここで殺され、自分たちの掘った穴に埋められたの」と教えてくれた。今はほとんどの遺骨は彫りおこされていて、穴だけが残って緑が茂り、平和が訪れたように感じさせる穏やかな空気が流れていた。その中をゆっくり歩きまわっていると、ダインが一つの木のほうに私を連れて行った。それは、トゥールスレンミュージアムで見たあの絵の木だったのだ。この木の幹に赤ちゃんが殴りつけられ殺されたのだ。その木が今も生々しく生えていた。そして、近くの小さな建物の中には、ここで掘り出された骸骨が無造作にガラスケースに詰め込まれていた。掘り起こされても、このキリングフィールドから離れることも出来ず、土に埋められる事もされない犠牲者たちを思うと、犠牲者は、今でも犠牲者なのだと感じた。しかし、ダインは「飾られることで、ここでどんなに悲惨にことがあったかを世界の人にみてもらえるから、ここにおくほうがいいのだ」と言った。

ナイトツアーでは、売春婦の店に潜入しインタビューをした。交渉のすえ、みごと中に入ることが許された。２２人でぞろぞろと怪しげな店内へ。店内はいくつもの部屋に分かれていた。カンボジア人もはじめて入った！と興奮。店のボス風のオバちゃんはとてもオープンな方でなんでも話してくれた。オバちゃんによると「この部屋は、教室で、この

中でいろんな勉強ができる。一つの教室に一人女の先生がいる。」・・・なんという表現の仕方だ。ピュアな心を持ったカンボジアキャンパーの男の子は口をぽかんと開けて、放心状態だ。それでも、気にせず、さらにおばちゃんは爆弾発言を続けたが、ここであえてこれ以上触れる必要もないだろう。触れるべき発言があと一つあった。「ここは、女の子に部屋を貸しているだけで、その子が得たお金はその子のものになる。」といっていた。つまり、働かしているのではなく、自ら働きたくてここに来ているのだと言いたいらしい。本当だろうか。

≪8月２６日GDIで行われている授業の内容体験、振り返り全体ミーティング≫

GDIで行われているモチベーションの授業の内容をすこし紹介してもらった。GDIの生徒は、このモチベーションの授業を通して、自信をつけ、シャイを克服していく。その授業内容は大変深く、日本でいう道徳のようなものだ。これは、GDI の大きな柱である授業だと感じた。生徒たちはこの授業で、「自分たちはどうして学ぶのか、考えなくてはいけないのか」ということに向き合っていた。生徒の大半は貧しい農家で、小学校中退者もいる。ここで学ばなければ、自分も祖父や両親のように貧しい農家生活を続けなくてはならない。彼らは、そのサイクルをとめ、ほかの仕事につきたいがために、このGDIに来て“必死”で勉強しているのだ。ここのGDIの生徒はABCが分からないところから３ヶ月で日常会話が出来るようになる。凄い！凄過ぎる！

今までのプログラムを振り返る全体ミーティングでは、カンボジア人の思いを聞くことが出来た。印象に残っている感想を紹介したいと思う。「アンノンカガンの人たちは受身な様に感じた。政府やNGOなどの助けをただ待っているだけだ。それに比べ、売春していた女の人たちは自分から状況を打開しようとお金を得ようと行動に出ている。その点では彼女たちのことをせめられない」（カンボジアキャンパー；パノウ）

≪８月２７、２８、２９日　アンコール遺跡ツアー、コンポントムGDI見学≫

朝早く起き、荷物を積み込み、トラックの荷台にのりアンコールワットへ。一日かけた２２人の大移動。夕方やっとアンコールワットのあるシェムリアップに到着。井戸で水浴びをし、民家に泊まるはずだったが、危険だとか何とかで、いろいろあって何故か警察の建物に泊まることになった。こりゃ安全だ。

次の日朝早くおきて、アンコールワットで日の出を見た。綺麗だった。本当に綺麗だった。眠気が吹っ飛んだ。観光客が多いため、子供たちがいろんなものを売っていた。「オネェサン　ヤスイヨ」日本語がしゃべれるよ・・。たくましく生きる子供たちの姿がそこにあった。

≪８月３０日フリー　、日本人ミーティング、全体ミーティング≫

キャンプもなかばを迎え、午後の全体ミーティングでは「このキャンプをどう思うか。どうしたら、もっとこのキャンプを発展さ成長させよいものに出来るか」「自分はそのために何が出来るか」ということを話した。「もっと仲良くなれる、もっとお互いのことを思いやれる。」というようなことをほとんどのキャンパーが言った。私もまったく同感だった。お互いのことを理解するには一週間という時間は短すぎる。しかし、お互い意識を

高めあえばあうほど、より深い関係が築けると思う。

後半の一週間ワーク

キャンプ一週間が過ぎ、何事もないかのようにゆったりと過ぎていたキャンプがやっと動き始める。

≪８月３１日ワーク（砂・砂利運び、穴掘り、棒を立てる）、アクティビティ（きりがみ）、班別ミーティング≫

この日私は違和感を感じていた。というより前々からの違和感が拡大していた。キャンプ中に班ごと（カンボジア人３人、日本人３人）で出し物やダンスをしたり、切り紙で一つの作品を作ったりすることがあったのだが、そのときにいつも日本人に意見を求めて、カンボジア人はあまり自分の意見を言おうとしないのだ。同じ班のやよいとはるか（同じ班の日本人キャンパーの名前）とも「班のカンボジア人の考えていることが分からない」という話題があがった。カンボジアキャンパーは楽しんでいるのか。何度か、パートナーダインに聞いてみたが「No problem（問題ない）」といつも返ってくる・・本当に今の状況がNo problemだと思っているのか？だんだんと「班ごとに何かする」ということへ抵抗感をもち、「No problem」の意味がわからなくなってきた。

何か問題ありげな雰囲気を察したのか、午後、ディレクターケイコが私をよんだ。ケイコはこうやって時々キャンパーを個別に呼んで個人面談（？）を開いている。このとき個人面談だったのは本当によいタイミングだった。私は今の班の状況・ワークの進め方に対する疑問など考えていることを打ち明けた。そしてこの日の夜に班別ミーティングが開かれた。

先に言ってしまうと、この話し合いは興味深く、かつ大変よいものだった。

私達の班の日本人３人の思っていたことをまとめると・・

「班で何か決めるというときに、いつも日本人に意見を求めるカンボジア人に疑問を持っている。意見を出さずに受身でギャップを感じる、一緒に考えて楽しもうとしていないように感じている。パートナー同士でいると何の問題もないのにどうしてグループだと上手くいかないのか・・・日本人の出したアイディアを広げてくれるのはありがたいのだが、もっと一緒に考えるのがグループだと思う」　ということだった。

この思いをうけての、班のカンボジア人（パノウ、ダイン、コンコイ）の答えは私の想像していないものだった・・。

「始めに意見を出さなかったのは楽しもうとしていなかったわけじゃない。まずは、様子をみていたんだ。切り紙日本人の紹介してくれたものだから、日本人のほうが良く知ってるだろうと思って、まずはどんな風にやるか見てたんだ。どうやるかの説明は英語でしてくれたけど、何で紙を切らされているのか始めは分からなかったんだ。」

・・・確かにそうだよな。説明されて、なんとなくわかっても、はじめてやることだし、良く知っていそうな人が実際やってみるのを見てから、自分の意見をやっと言えるようになるもんだよな。確かに、それが普通だ。

他にもこんな理由があった。

「日本人はみんな大学までいっていていろんなことを知っている。だから、そんな人たちの前で変なこと言ったら恥ずかしいと思って、意見があってもいえないことがあった」（コ

ンコイ）
「最初に意見は出さない」という一つの事実がこのミーティングの前と後では見方が変わった。ミーティング前は日本人の見方、カンボジア人の見方だったが、今は班員全員が同じ方向からこの事実を理解した。
彼らは、十分楽しもうとしていたのだ。彼らにとっては本当No problemだったんだ。思い返してみると確かに、理解するために様子をうかがったあとは、カンボジア人が意見を出すこともあった。もう、最初に意見を求められても腹は立たないぞ！！本当に理解しあえた瞬間だった。かってに自分の中で「あの人はこう思っているんじゃないか」などと考えても意味がない。「話さなくっちゃわからない！」ということを身をって体験し、実感できた瞬間だった。

≪９月　１日　ワーク（砂・砂利運び、ネットかけ）≫
昼間はワークで汗を流した。
夜、ディレクターから「班で歌を作ってください」とのお題が出た。おぉ班での作業だ！どうなる・・ｆｒｉｅｎｄｓｈｉｐ班？
この日の班での話し合いは、とてもよかった。スムーズに進み、何より「班でいて居心地が良い」と思ったのは初めてだった。

≪２・３・４日ワーク（砂・砂利運び、穴掘り、ネットかけ）≫
班だけでなく、だんだんと、全体の雰囲気もよりよいものになっていく。
ワークはネットを張って日陰を作ったり、トイレや水浴びするところなど、水場をコンクリートで固めた。ワークも協力し合い、汗だくになりながらも、笑顔や歌があふれていた。

≪５日ワーク、アクティビティ（お絵かき）（グループ対抗戦）、全体ミーティング≫
キャンプ最後の夜。みな一つの円を作り、その中心でろうそくの明かりのもと、一組づつパートナーへの手紙を読む。この、二週間で育てた私たちの大きな大きな友情が実感できたひとときだった。みんなが読む手紙には愛であふれていたから。

こんなにも、お互いを理解しあおうと努力した
こんなにも、お互い思いやり助け合った
こんなにも、お互い歩みよれた
そんなことを実感しました
そして・・・
こんなにも素敵な仲間たちと出会えた私は本当に幸せ者だなぁ

最後に
私たちとキャンプをともにしたカンボジア人はお金がないために小学校中退者などですが、ＧＤＩで勉強し、ＧＤＩの先生となり、ＧＤＩの地方校を任されているマネージャーです。私は彼らを尊敬します。ＧＤＩの卒業生は英語を使いデパートで働けるようになり、

しっかりお金を稼げるようになっている人もいます。そんな彼らから学んだのは、誰もがPotential（潜在能力）をもっているということです。「あの人は、凄いけど自分はその人の様にはなれない。」と努力もしないであきらめてしまうことがあるかもしれない。あきらめたら０％になる。例えば「あの人は英語がしゃべれるけど私はああはなれない」その人は、英語をしゃべれるようになるために何かしたからそうなったのだ。そういう努力をしないで、なれるわけがない。でも私たちは皆、Potential を持っているだから、自分も頑張ればその人のようになれるはずだ。いきなり大きく変わるのは難しいが、一歩一歩、少しずつ進んでいけば、いつか到達できる。彼らはそんなことを私に教えてくれました。

岩崎美和子